

江北の四季

令和2年
9月25日
第26号



シロバナハギ(白花萩)

☆シロバナハギ(白花萩)

またはシラハギ(白萩)。一般によく見られる紅紫(べにむらさき)の花を咲かせるのはミヤギノハギ(宮城野萩)。宮城野の名前は、ミヤギノハギの産地が宮城野(現在の仙台市)にあったことに由来するらしい。そんなことから宮城県の県花にもなっています。白

花は清楚な感があり、爽(さわ)やかな秋の雰囲気を感じ(かも)し出してくれます。

ハギの名前の由来は、冬の間枯れたと思っていた木から新しい芽がたくさん生えてくるので、生え木(はえぎ)と呼ばれ、それが変化しハギとなったそうです。

ハギは成長の早い木でしかも春に新しく伸びた枝にだけ花をつけるため、冬のうちにたくさん枝を剪定してしまう必要があります。また枝が大きく垂れるため場所をとってしまいます。以前は庭にミヤギノハギを植えていたのですが、そんなことがいやで起こしてしまいました。しかしながら年齢のせいか、しだれて秋風になびく風情を求めて、またハギを庭の隅に植えてしまいました。



ヌスビトハギ(盗人萩)

☆ヌスビトハギ(盗人萩)

見つけました、見つけました。自宅近くの道路端にはアレチヌスビトハギしか見られませんでした。が、旧浅井町の山の近く、人しか通らない道端の木の下に、ひっそりと生えていました。アレチヌスビ

トハギに較べると、茎は細く背も低く、葉は柔らかく、花は非常に小さく可愛らしいです。これでは外来種に負けてしまいますね。

日本で育つと花も人もひ弱になるのでしょうか。まあ、その分、感性は豊かになると思います。なんせ、雪月花に人を思い、秋の虫の声を聴くのですから。でも、「雪月花時最憶君(雪月花の時 最も君を憶おも)う」は唐の白居易(白樂天)の詩の一節ですね。



9月21日(月)の月

○月々に月見る月は多けれど

月見る月はこの月の月

よみ人知らず

毎月のように月を鑑賞する月があるけれど、名月を見る月といえばまさに今月のこの月だね。

川端康成が昭和43年(1968年)に行ったノーベル文学賞授賞記念講演『美しい日本の私―その序説』の中で、鎌倉時代の高僧、明恵上人(みょうえしようにん)の歌を紹介しています。

あかあかや あかあかあかや あかあかや
あかあかあかや あかあかあかや月

明恵

明恵は月があまりにも美しいので言葉にならず、右のように詠むしかなかったのですね。そんな十五夜の満月が見られたらいいですが、三日月や上弦の月は前線や台風のためほとんど見えませんでした。はて、さて、十五夜の満月は見られるのでしょうか。兼好法師は『徒然草』で次のように述べています。

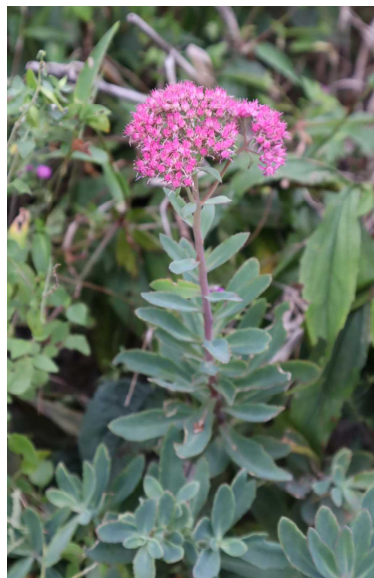
花は盛りに、月は隈(くま)なきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れ籠(こ)めて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。

花は満開のときだけを、月は雲りがないのだけを見るものであるうか、いやそうではない。降っている雨に向かって(見えない)月のことを慕い、すだれ

を垂らして室内にこもり春が移り行くのを知らずにいるのも、やはりしみじみとして情趣が深い。

俳句の季語にも、無月(むげつ)や雨月(うげつ)という言葉があります。どちらも十五夜の月が雲や雨で見えないことを言います。どちらにしても名月を見られないのを惜しみながら、その見えないものに思いをはせているのですね。

ということ、中秋の名月が見られても見られなくても楽しむことにしましょう。



ミセバヤ

☆ミセバヤ

物語の始まり始まりー。

昔、昔、と言っても二百年あまり前の話です。高野山の僧侶が山の奥深くで、美しい花を見つけました。僧侶はその美しさに心うたれて、それを和歌の師匠である冷泉為久(れいぜいためひさ)に何としても見てほしいと思い、『君に見せばや(あなたにみせ

たいものだ)』という一文とともに花を贈ったそうです。それ以来、この花は「ミセバヤ(見せばや)」と呼ばれるようになりました、とき。

ミセバヤは多肉性の宿根草ですが、日本で古くから栽培されてきたそうです。秋になると小花が密集して咲き、秋が深まり花が終わる頃になると丸い可愛らしい葉が紅葉します。耐寒性、耐暑性が高く育てやすい植物で、放任でも美しい姿でまっています。



トケイソウ

☆トケイソウ(時計草)

前回の横からの写真では時計に見えていませんでしたので撮り直しました。上から見ると、この花は時計の文字盤を連想させます。種類も多く多彩な花が初夏から秋まで咲きます。ただ、南国のパシフィカフルーツと同じ仲間、寒さに弱い品種が多いです。地植えるのであれば耐寒性のあるものを選びたいとだめです。写真はアメジストという品種で、青紫色の花が長期間開花し、耐寒温度は-10℃です。

○満月以降のお月様も日本人は愛してきたようです。様々な名前がついています。

16日(10月2日) 十六夜(いざよい)

一晩中月が出ているので、夜を知らないことから不知夜月(いざよいづき)とも書きます。十六夜も不知夜も「いざよい」と読みます。躊躇(ちゅうちよ)するという意味の古語に「猶予う(いざよう)」という言葉があるようです。満月の翌日なので月の出が満月の時より遅れるのですが、それを「月の出をためらう月」ととって名付けたようです。

旧暦8月17日(新暦の10月3日)

立待月(たちまちづき)

十六夜より月の出はさらに遅れて、日没より「時間」〇分後になります。日没後、月の出を今か今かと立って待つ内に出てきます。現代人には待てませんね。

18日(4日) 居待月(いまちづき)

「居」は座るの意味で、立って待つには長すぎるので家の中で座って月の出を待つ月です。

19日(5日) 寝待月(ねまちづき)

別名、臥待月(ふしまちづき)。さらに月の出が遅くなるので、体を横たえて待ちます。熟睡してしまおうと見る事ができなく

なります。

20日(6日) 更待月(ふけまちづき)

夜更け(よふけ)まで待たないと見る事ができません。午後10時頃に昇りますが、当時は電灯がなくロースクや菜種油も高価で早寝早起きが習慣でしたから、ここまで待つのはよほどの月見好きですね。と言うか、中秋の名月頃は前線や台風でお月様を見られない日が多いので、満月の過ぎたお月様ですが、天気の良い日は待って待ってでも見たのでしょうね。それとも、欠けゆくお月様に、満月以上の風情を感じたのでしょうか。

23日(9日) 下弦の月(かげんのつき)

「日月と同じ半月ですが弓の形が逆になります。弓の弦を下にして沈みますが、東の空から昇るときは弦は上に見えます。

26日(12日) 有明月(ありあけづき)

夜明けの空(有明の空)に昇る月。三日月とは逆向きの細い月。残月(ざんげつ)とも言います。

30日(16日) 三十日月(みそかづき)

○蛇足

みそかは元々月の30番目の意味ですが、晦日(かいじつ)が月の最終日を意味するの

で、月の最終日の30日も31日も晦日と書いて「みそか」と言うようになったそうです。「12月31日」は一年の最後の月の最終日なので大を付けて大晦日(おおみそか)となりました。

また、この日は月が隠れ、翌日は朔(さく)新月)となるので、別名が月隠(つきごもり)。それが転じて月末を晦日(つきごもり)、「12月末が大晦日(おおつきごもり)となったようです。

☆我が家の庭も秋の風情を感じるようになりました。



上 ムラサキシキブ(紫式部)



右下 ノゲイトウ(野鶏頭)

○学校の理科の時間に学ぶのは、新月、半月(上弦)、満月、半月(下弦)くらいですが、まあなんとたくさんの風情ある呼び名があるのでしょうか。日本人は古来より月に對して特別な思い入れをもってきたのでしょ
うね。

百人一首に月の歌が十一首もあるのはそんなところからでしょうか。若い頃、一度は一生懸命覚えたのですが、ほとんど忘れてしまいました。いくつか月の歌を抜き書きしましたので、月の見えない夜にはこちらを味わってください。

月見れば千々(ちぢ)にもものこそ悲しけれ
わが身一つの秋にはあらねど

大江千里(二十三番)

月を見上げるといろいろな思いがあふれて悲しくなるよ。私一人のための秋ではないというのにね。

有明のつれなく見えし別れより

暁ばかり憂きものはなし

壬生忠岑(三十番)

夜明けの空に残る月が冷たく浮かんでいたあの日のあなたとの別れから、ぼくにとって夜明けほどつらいものはないんだよ。

めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに

雲がくれにし夜半(やわ)の月かな

紫式部(五十七番)

やっと会えたと思ったのに、あなたなかわからないうちにいなくなってしまうた。出たと思ったらすぐに雲に隠れた月のようなわ。

心にもあらでうき世にながらへば

恋しかるべき夜半の月かな

三条院(六十八番)

思いがけず、このつらく悲しい世を長く生きてしまったとしたら、いつか恋しく思うのだろうなあ。お前と見上げた今夜のこの美しい月を。

秋風にたなびく雲の絶えまより

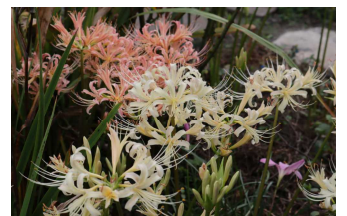
もれ出づる月の影のさやけさ

左京大夫顕輔(七十九番)

秋風に吹かれてたなびいてゆく雲の切れ目から、もれ出てくる月のひかりがきらきらと明るく澄みきっている。



大毛蓼。小花の紅色が鮮やか。垂れ下がる花穂に秋の風情が一杯。



リコリス(園芸品種)



湖岸に咲く蔓珠沙華



生花新風体



立華新風体

パープルファインティングラス、マンジュシャゲ、オクロレウカ

リコリス(マンジュシャゲ)、ヒペリカム、オクロレウカ、ムラサキシキブ、メリー、ダンギク、キイチゴ、カシワバアジアイ、

